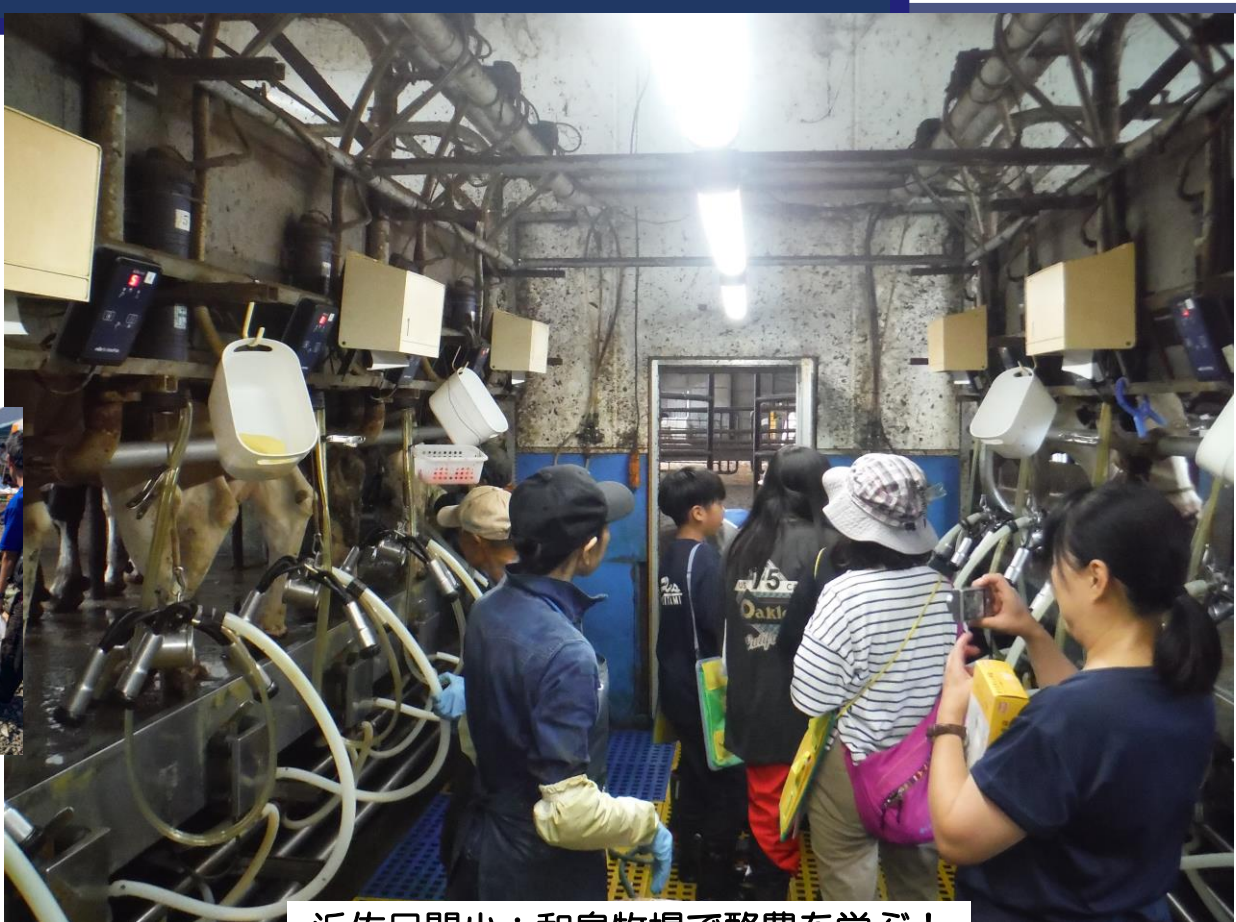


小中一貫教育の取組

『ふるさと教育』の推進
～ 人づくり・つながりづくり・地域づくりの循環 ～

授業の様子



浜佐呂間小：和泉牧場で酪農を学ぶ！



「サロマ学」で地域を学ぶ

「総合的な学習の時間」でふるさと教育を推進

総合的な学習の時間

カリキュラムを統一

教育委員会通信第一号でお伝えしましたが、佐呂間町では今年度より、小中9年間の学びをつなぐための柱となる学習として、総合的な学習の時間を「サロマ学」として取り組んでいます。昨年度まで各小学校において作成したカリキュラム（学習内容）を統一して、どの学校においても同じ内容で学習しています。

三年「かぼちゃ」
四年「ホタテ」
五年「酪農・畜産」
六年「持続可能なまちづくり」

※小一・二年は「生活科」において地域を知る取組。中学校では「ふるさと教育」として、佐呂間町のキャリア・佐呂間町の福祉防災等を学んでいます。

地域を考える

本物体験で価値を実感

3年生

3小学校合同で、道の駅「サロマ湖」で、自分たちが育てたカボチャの収穫を行いました。収穫したおもちゃカボチャは、大収穫祭において、3年生のアイデアで絵を描けるようなブースを設けました（右下写真）。また、大きなカボチャでランタンを作り、ハロウィン・ナイトを開催した会場に飾られました。

5年生

5年生は、佐呂間小と若佐小が川又牧場、浜佐呂間小が和泉牧場で体験活動を行いました。写真は浜小の和泉牧場での様子。搾乳の様子を見学したり、子牛にミルクをあげたり、考えてきた疑問を和泉さんに質問していました。児童は初めて体験することばかりで、目を輝かせていました。

「ふるさと教育」の推進～人づくり・つながりづくり・地域づくりの循環～

サロマのヒト（人材）・モノ（自然・歴史・産業等）・コト（体験）をサロマ人とともに学び、社会や地域づくりに貢献できる子どもの育成

1. 背景及び現状

【求められる資質・能力】
少子高齢化や人口減少、それに伴う地域活力の低下等が懸念され、かつ変化が激しく予測が困難な時代となっている。このような時代に求められる資質・能力は、「地域の課題を発見し、解決に向けて主体的、協働的に取り組み、新たな価値を創出できる力」である。

【現代社会におけるふるさと教育の意義】
世界がより身近になり、世界と日常的につながっている今、ふるさとについて学ぶ意義は、子どもたちにとって生きていく支えとなり、夢や志を持って行動する原動力となるだけに留まらない。世界がより狭くなっている中で、ふるさとの課題解決はグローバルな視点を持ちながら検討する必要がある。

【佐呂間町の児童生徒の現状】
これまでも各教科等で佐呂間町について学んでいるが、主体的にふるさとに関わり地域社会の中で行動しようとする意欲は低い傾向

2. 考え方・方向性

佐呂間町の自然、産業、歴史・文化等について、地域住民との関わりを通して、「ふるさとサロマ」に対する誇りと愛着を育み、地域社会の一員として「ふるさとで生きる」価値を実感

視点：時間軸（現在・過去・未来）
空間軸（佐呂間町・道内・国内・外国）

【育てたい資質・能力】
・本物体験等を通じて「ふるさとで生きる」価値の実感
・ふるさとのよさを体感し、価値付け、発信する力
・ふるさとの課題を発見し、多様な他者と協働して解決する力

ICTの活用

3. 「サロマ学」の学び

本物体験（学びの原体験）：①なぜ発信、②没頭体験、③五感活用

実感（地域を知る）※本物体験

思考（地域を考える）※本物体験（一部）

創造（地域を創る）

小1 小2 小3 小4 小5 小6 中1 中2 中3

食育

異文化理解

言語活動

○「情報活用能力育成に係る系統表」を踏まえた取組
・一人一台端末を効果的に活用
・Web会議アプリを活用した交流学習

○食育
・地産地消や自然の恵み・勤労などへの感謝や食文化を意識した学習

○異文化理解
・道内、国内、海外とのつながりや比較を意識した学習

○言語活動
・目的意識、相手意識
・地域住民との対話の量や協働の学習

大収穫祭で、佐呂間小学校3年生のアイデアで、来場した人たちに、おもちゃカボチャに絵が書けるようなブースを設けました！

「JAL DE パンプキンキャンペーン」 国内46の空港で佐呂間産のカボチャを展示。ここでも児童が育てたカボチャが活躍。ディスプレイが最も素敵だった空港に対して、武田町長より表彰盾を贈呈予定！